

---

研究所報告

LETTERS

---

2024年度 TU-RIPS 第13回 セミナー実施報告  
**SNS と誤情報、および情報格差**  
**－AI時代の情報格差と大学・大学生－**  
(2024年9月6日開催)

Report on the 13th TU-RIPS Seminar in 2024  
**SNS, Misinformation, and the Information Gap**  
**- Information Gap in the AI Era and Universities/University Students -**  
(September 6, 2024)

イム ドンウ<sup>1</sup>

Abstract

The TU-RIPS seminar on “Information Gap in the AI Era” was held on September 6th, 2024, by the Research Institute for Policy Studies, Tsuda University as a hybrid event. The topic of this year’s TU-RIPS seminar series is “Poverty and Society”, and this is the third event of the TU-RIPS seminar series of 2024. Dr. Dongwoo Lim, Associate Lecturer at Tsuda University was invited. The lecture was divided into three main parts. The first part focused on "Today's AI," the second part addressed "AI Divide," and the third part discussed "Responses as University Students." The seminar was organized and led by Dr. Naoko Shinkai, the Director of the Research Institute for Policy Studies. Approximately 100 individuals attended the event.

2024年度津田塾大学総合政策所 TU-RIPS セミナーシリーズ第13回「SNS と誤情報、および情報格差－AI時代の情報格差と大学・大学生－」は、2024年9月6日金曜日にハイブリッド（オンラインは Zoom）で開催された。2024年度の TU-RIPS セミナーのテーマは「貧困と社会」である。今回は2024年度の3回目として、津田塾大学助教のイムドンウ氏により講義が行われた。

講演の内容は、大きく三部に分かれていた。第一部は「今日のAI」、第二部は「AI デイバイド」、第三部は「大学と大学生としての対応」に関する内容であった。

第1部では、AIによって生成された動画、AIによって笑顔に加工された津田梅子さんの

---

<sup>1</sup> 津田塾大学総合政策研究所 常任研究員、Dongwoo Lim, Research Fellow, Research Institute for Policy Studies, Tsuda University.

写真、AI によって生成されて選挙や戦争で使われている偽画像、数学やコーディングなどの教育における AI の活用状況などが紹介された。イム氏は、AI が教育や業務の現場で多く活用されていること、AI が作った動画や画像のクオリティが人間には区別しにくいほど高くなっていること、さらには、犯罪や戦争などにすでに悪用されていることを説明し、AI についてバランスよく理解することが重要だと強調した。

第2部ではAI デイバインドが扱われた。より身近な概念である情報格差についての説明から始まり、AI デイバインドが個人、企業、そして国家レベルで激化することが予想されると説明した。また、AI デイバインドがジェンダー、雇用、貧富の差など他の社会問題とも関連する可能性があるとは指摘した。特にビッグテック企業と各国政府が情報独占の論争を巡って対立し、法的紛争にまで発展している点、さらにAI デイバインドが引き起こす問題に対する学界や政府などの関心も高まっている点を通じて、AI デイバインドが深刻な社会問題となっていることを説明した。

最後に第3部では、大学生としての対応について扱った。まず、進みたい分野や担いたい役割によって必要な技術が異なるという前提のもと、ChatGPT、Gemini、Copilot などの広く使われているAI ツールについて紹介した。また、就職活動をしている求職者だけでなく、採用担当者もすでに選別のためにAIを活用しているなど、就職市場がAIとAIの対決になっている現実を指摘した主要メディアの記事も紹介した。イム氏は、特に、普段からアンテナを張ってAIに関する知識を身につけておくこと、自分の分野と結びつけて必要なAIスキルを習得しておくこと、批判的な姿勢を含めてAIに対する自分なりの観点を持つておくことなどを勧めた。視野を広げるためには、例えば技術決定論や技術の社会的構成論など、社会と技術を巡る既存の理論も活用できると付け加えた。最後に「AIに仕事を奪われるのではなく、AIに精通した人によって仕事を奪われる可能性が高い」とNVIDIAのジェンスン・ファンCEOの言葉を引用し、講義が終了した。

# アンテナ 進化 進歩 仕事採用 必要 お話 動画 判断 技術 生成先生 興味深い時代 今後 AI 利用 必要 お話 動画 技術 生成先生 興味深い時代 今後 AI 就活画像 情報

講義終了後、事後アンケートを実施し、フィードバックを収集した。また参考として、ワードクラウドも作成したところ、「就活」「必要」「技術」「仕事」などの単語が目立った。コメントの詳細な分析から、次のように、多くの参加者が AI と今後のキャリアの関連性について高い関心を持っていることがわかった。

- 就活の採用などは AI が判断するのではなく、人間が判断すべきだと思った。
- 特に就活の話が印象的でした。学生は ES を AI に書かせ、企業側は採用に AI を活用するという一方で、もう人間は制作や判断に関わっておらず、虚しくなりました。
- 以前は、室内で仕事をするような人達より力仕事の仕事がなくなると言っていましたが今はその逆になりつつあることで、ますます自分がどんな職に就きたいのか分からなくなりました。
- 学生でデジタルデバイスが十分に使うことが出来ないと、働きたい場所で採用されないかもしれないという格差に関しては対応が必要だと思いました。

さらに、AI 技術の学習意欲を示した参加者も見受けられた。

- AI の分野の知識が乏しいと今回の授業を通して感じたため、関心を持ち知識を深めていこうと感じた。
- 具体的に大学生がどのように AI スキルを上達させ日常で活用するべきか知りたくなくなりました。
- 就職活動などこれから不可欠となってくれ技術なので、取り残されないように学

んでいきたいと感じた。

- いろんな AI 技術を知っていてあえて使わないことは損にはならないが、せっかく使える技術を知らないで使うことができないのは損なので、アンテナを張っておくことは大切だと改めて思った。

一方で、AI に対する潜在的なリスクや課題について、不安や懸念を示す意見も多く見られた。

- AI には興味深い特徴がある一方、暗い面も兼ね揃えているため、付き合い方に注意が必要だと思いました。しかし、AI の精度が上がるにつれ、その付き合い方も変化していき、人間に良くも悪くも影響を及ぼすのは確実なのかなと思いました。
- AI を使って写真や動画が画像できてしまうのは非常に怖いこと。それによる被害を受ける人は多いのでは？
- 私個人的には AI の信ぴょう性に関して疑っている部分があり特にマーケティングの分野に関しては回答が曖昧ではないかと考えている。
- AI は便利だが凶器にもなる。また、今の時代 AI を使わないと時代遅れだと思われる。
- AI を使って動画を作成できてしまうのであればフェイクニュースも増えてしまうのではないかという懸念があります。
- 近年、AI が急激に成長し、プロパガンダなど負の側面で活用されていることに対して何か対策を施す必要があると感じた。
- 自分が普段 SNS などで見ている動画の中にも、リアルな映像だと思い込んでいて、実は CG によって作られていたなどということもあるのかもしれないという恐怖も感じた。
- 現代社会において、AI の導入という表現より AI による侵食という表現の方がしっくりきてしまいました。
- AI のせいで人間本来の魅力や個性が失われてしまうのかもしれないと感じた。

今回は、TU-RIPS セミナーシリーズの「貧困と社会」の第3回目として、情報格差の観点から見た貧困への取り組みについて、イム氏が、主に AI がもたらす機会と危機、そしてそれに対する大学生としての対応について講義を行った。当日は、学内外より対面とオンラインの参加者を合わせて約 100 名が参加し、講義後には教員間の意見交換が行われ、多くの学生が感想を寄せるなど、AI と本講義に対する高い関心が確認できた。今回の講義で得たインサイトを、今後の授業や研究にも活用していきたい。